

# 介護等体験実習の報告

## 生きるということを学ぶ

谷 口 めぐみ (平成21年度文学部文化財学科卒業)

### 1、はじめに

私にとって「介護等体験」とは、「生きるということを学ぶ」体験でした。社会福祉施設も、特別支援学校もともに、「人間としてのあり方・生き方」を学ぶことができました。

### 2、人と触れ合うこと

2008年9月、私は社会福祉施設に体験に行くとき、介護等体験という制度に疑問を抱いていました。なぜなら私は実家で祖父母と暮らしており、日常的に高齢者と接する機会が多いからです。「こんな体験は、都会に住んでいて核家族で育った大学生だけが行うべきだ」とすら思っていました。しかし、現場に入っていくと、そのような考えが甘かったことに気づかされました。

ケアハウス、デイサービスの利用者とは年齢も離れており、共通の趣味があるわけでもないため、「どういう会話をしたらよいのか」を初日から悩んでいました。しかし数日も経つと、利用者との会話を楽しめるようになりました。利用者との会話を通して、私はあることに気がつきました。それは、「人は人と付き合うことで積極的になれる」ということです。特に印象的だったのは、「デイサービスに来る前は、足を悪くしているからあまり外出してなかったけれど、デイサービス仲間とカラオケに行ったりご飯を食べに行ったりして、積極的に外出するようになった」という一言でした。私は、人と話をすることで自分を積極的に変えることもできるのだと感動しました。人と付き合う

ということが、いかに人生を豊かにし、大切なことであるかを知りました。

### 3、気持ちを表現すること

11月には特別支援学校で体験をさせていただきました。私が担当になったクラスは高等部3年生の小児麻痺や脳性麻痺のため、意思疎通のできないD課程の生徒が在籍するクラスでした。そのため、授業のほとんどが日常生活の訓練のようなものでした。私が通っていた高校とまったく違い、5教科の授業がありません。「この子たちは自分で何もすることができないのに、高校に通う意味があるのか」とさえ思っていました。しかし、ベッドサイド授業に参加させていただいたとき、その考えが一気に吹き飛びました。

ベッドサイド授業とは、重症心身障害児施設に入院している生徒のために、週に1回1時間ほどベッドの脇で行う授業のことです。授業では音楽を聴いたり、学校の様子やクラスメイトを撮影したビデオを見たり、紙芝居を見せたりしました。私が紙芝居をすることになり、少し緊張しましたが、できるだけ抑揚をつけて読むように心がけました。紙芝居を行っていると、彼の心拍数が安定し、表情が明るくなり、少し動きも出てきました。私は、「彼は彼なりの方法で私の紙芝居に対して反応してくれているのだ」と思い、驚きました。人はたとえ何も見えなくても、聞こえなくても、相手を感じ、その思いに答えようとする力をもっているのだと感動しました。

### 4、教育の原点

次の日は学園祭が近いということもあり学園祭のリハーサルや、芋掘りなどを行いました。この日はD課程の授業だけでなく、C課程の授業に参加させていただくことになりました。C課程クラスとは、肢体不自由・知的障がいがあるものの、意思疎通のできる生徒が在籍するクラスです。彼

らは彼らなりのコミュニケーションのやり方で音楽を楽しんでいました。担当の先生が、授業をする上で大切なことは、きちんと楽器を弾けることでも、歌えることでもなく、自分の気持ちをどう表現するかということだとおっしゃいました。そのとき私は、彼らが必要としている教育は、数学でも英語でもなく、生きること（食べること、声を出すこと、意思表示をすること）であると感じました。また、それをできるように手助けを行うことが教育であると確信しました。体験初日の朝に校長先生が、「養護学校には教育の原点がある」とおっしゃった意味が少し理解できたと思いました。

この学校に来てしきりに感じていたことは、「生徒たちの瞳が美しい」ということです。私の担当したクラスの担任の先生もそうおっしゃいました。その先生の、「彼らは何も見えていない、聞こえていないかもしれないが、誰よりも気持ちを敏感に感じることができる。その分、“仕事だから”と割り切って接していると、彼らはその心を見透かしている」という一言が、とても印象的でした。教育が「無償の愛」であるゆえんが、この言葉に秘められていたと思います。

## 5、まとめ —教育者に必要なこと—

介護等体験は、自分の傲慢さ、未熟さを改めさせられる体験だったと思います。社会福祉施設では、「人と付き合うことの大切さを理解すること」を学ぶことができました。特別支援学校では、「教育は無償の愛であり、教師は生徒が必要としていることに全力でバックアップしてあげることを学ぶことができました。

介護等体験の意義や目的は、個人の尊厳や社会連帯の理念に関する認識を深めることです。しかし私はそれだけでなく、人と付き合うことの大切さ、教育が「無償の愛」であることを、改めて体験するためのものであると考えています。

## 介護等体験実習を終えて

山 方 結加里（平成22年度文学部国文学科卒業）

中学校の教員資格を取得予定の学生には、5日間の社会福祉施設への実習、2日間の特別支援学校への実習が課せられています。しかし、私には正直この実習が自分の夢である教員にどのように繋がるのか、はっきりした答えはでてはいませんでした。ですが、実習に行くには何か目標を持ち、得てくるのが大切であると思いました。

実習に行くにあたって、私は、「相手のことをよく知ること」という目標をたてて実習に臨みました。

特別支援学校への実習は二日間というとても短い期間でした。

最初のオリエンテーションでは、特別支援学校に通う子供たちの症状の程度や地域との連携などのお話をしていただきました。生徒の症状を知った時の私の気持ちはどんな事をするのだろうか、ちゃんと受け入れてくれるのだろうか、という不安でいっぱいでした。

そんな気持ちを持ちながら教室に向かうと六人の生徒が私を出迎えてくれました。友達との会話にしても、休み時間になると外で遊ぶ為に飛び出してしまふ所も、普通の小学生となら変わりのない表情に少し驚いてしまいました。その生徒たちと、たった二日間だけでしたが、勉強をしたり、作業をしたり、校庭で遊んでいると、とても勉強になることがたくさんありました。

作業の時間に、進み具合が少し遅い子には先生からの指摘がなくても、自分の作業を中断して手伝っている姿には大変心を打たれました。また、着替えや身の回りの整理を手伝っている姿を見て、私の頭の中に「障がい者」という言葉で何気なく、生徒のできることやできないことを勝手に

制限していた自分がとても恥ずかしくなりました。そのことがあってからは、多少の知的な遅れは見えただけで、できないことを投げ出さずに一生懸命取り組む姿がとても印象的でした。

この二日間の実習や五日間の実習を終えて、私は最初の目標である「相手のことをよく知る」という面において、紙面での情報や学校の授業で学ぶような知識も大切ではありますが、自分で接してみることで自分だけの知識や考えが確立できました。

また、介護体験実習を終えて、実習に臨む前の答えも自分の中で見つけることができました。

今日の教育とは「人と人との繋がりの中でも特に、相手に自分を知ってもらい、相手のことを理解し、人と人との信頼で結ばれた中で成り立つもの」ではないか、という自分なりの答えも持つことができました。

